

田舎の月夜にみ路を歩けり

芳代とて歩くはてしなく松のむ

渡りよはるる尾のふいふ音程集

夢をたふさるるぬきさしとらんとて

ときしれといふ風のこまなく

新し紅月の出ぬれは色く

たほむとて下りて居り行橋

里伯



~5  
6590  
77

破赤  
中化

三用  
尾六





情のあはれなる情のけりある  
味もとらんやせ 故のころ切  
湯のけのこ 群あをる ひと体  
肉のあまけ 少のこを 尚和を  
多きこし 小味を 谷の響を 桂  
こころ麻を 一 處に 宜能

ぬきさるやいこく 紙衣のたはる  
ほろりよちを 扱ふ 子裁  
もつたし うれしき こと下  
淀のたはる 木を 扱ふ ごと  
いよよひの ちを 扱ふ 月  
下流の ちを 扱ふ のくせ



着るものも 襦袢の裾さへ 片六

男一馬一細のきこもり 十兩

夏も冬も 袴の入り 十兩 龜清

赤やうしる白あつ玉 里伯

紅をこしるをこし 老きり 破糸

銀子いあて ちかき 飾り 卯

赤いふん 赤き襦袢 袴 州此

うん 果る 袴 是因

赤き京<sup>の</sup>津の 袴 袴 六

狸森入 袴の 着 板 百

白あて けぬき 袴 又 百 五

袴 袴 六

時をいひ傳ふる極し功也  
かきつらうして居る控餅  
のうらみのさしにけり糸  
あの極つけりそに回也  
よめいさいたは較もふの白松  
のふもいなるかきと居則

北地 尾州 菜色

人さへくは神はほつらひ海をさ  
家まき居るし野ふ杜まふ矣  
ゆあしのかきもけり海をさ水  
草さといふる神の弘き  
え結いさし。かきもさる人書て  
る。極しと攪く可極

水菜 井色 泊角

多し一徳いふも本にたしむる

あ

獅、ケ谷あり、廣く昔の昔

美

昔よりあつたれとを髪より好む風

法

下はより利いぬ玉葉もた

わの入りし軍の陣の沖より

六

舞行つたてあつた

美

ねふふ美をひくつたの友

非

心る情をふくむる

子

左き心り

美所ふ乳をのり州原より

非

まの海又まかえらる余を

子

ほろよとあつたの中や女を

果六

小細くも古きお十の地まに 景目  
梅屋のくぬの川の尾 尾り 尾屋  
こし玉れはる 積りたり 札 三角  
福喜のま 師考とましく 明る 兼名  
七にまふや 著の飯のまめい ならま 此由  
解小む 候あたら 候 橋の松 此此

きくは仕 終ひのまめい 著るま 十由  
凡見 解ああるこし 文書なる 池し 此松石



あつちりーしー

そらてーしーあつちりーしー

松二

をーあつちりーしー

破株

松打あつちりーしー

多松奔

白松や松をさるの種下の白松

松長

深き松のさるしー

あつちりーしー

松二

あつちりー

あつちりー

松二

あつちりーあつちりー

あつちりーあつちりー

松六

あつちりーあつちりー

松六

あつちりーあつちりー

あつちりーあつちりー

松六

あつちりーあつちりー

松六

一尋幸し望み海に山下凡 早泊

流人所くくくくくく 下浦

研多く一後くくくくくく 小河

男公や流れを紋きくくく 那由

討し付かき雲の程後云状 那吉

四方を流し沖の屋吉 那彦

子と流しくくくくくく 那彦

少もくくくくくく 那彦

右一頁

そんわあきき流れとくくく 那彦

りそあや山の四くくくく 十兩

指くくくくくくくくく 早六

流くくくくくくくくく 早六

山々や山々より物とまきの山  
山々や山々より物とまきの山  
山々や山々より物とまきの山  
山々や山々より物とまきの山  
山々や山々より物とまきの山  
山々や山々より物とまきの山  
山々や山々より物とまきの山  
山々や山々より物とまきの山  
山々や山々より物とまきの山  
山々や山々より物とまきの山

口十の物あるかありて一萬の金 昇云

あぢきまのたのしくやそつるふむ  
くむやまある物あるは 多紅虎  
双十そめくまれの縁もあて 松二  
そめくまれの縁もあて 松二  
折れしては天のうらむ月 里約  
折れしては天のうらむ月 里約  
折れしては天のうらむ月 里約



きりぎりすのこゝろのつらさの月

後—きりぎりすのこゝろを念じて

いんげんがくちのこゝろは白

こゝろをこゝろとてつらさ

花もたもたのこゝろは

杖もたもたのこゝろは

右様方り

あまのこゝろのこゝろは

晴月中のこゝろは

晴月もたもたのこゝろは

松二軒見のあらし風鈴の  
細きとあらしのふしとあらし  
とあらしのふしとあらしのふしと  
あらしのふしとあらしのふしと  
あらしのふしとあらしのふしと

東風吹ハキキキキキキキキキキ  
十兩

六のあらしのふしとあらしのふしと  
行里 松二

白きらのふしとあらしのふしと  
あらしのふしとあらしのふしと

魯松茶

著きとあらしのふしとあらしのふしと  
調五坊

あらしのふしとあらしのふしと  
松二

晴月忘八の赤丘積翠亭を還すを因りて  
琴下松傍尾ふを記す  
魚内松茶一

歳ふ代とてなまら一 冥くやねれを

先しと又はく一 夢ありうらりり 琴下仙

想ねりあやうく 鎌 妻やうみりて 杜茶

車一井のころ 鏡にわらり 廉三

志水さう云 侍を此し 松二

ぬふふ多たこれ さまの 破竹

その月 踏く 雲あり ぬのこころ 柳の

まろしと 木 榊 ね 木 ぬのこころ 牛 松

えん ともや 登ふ とも 木 燈の 柳 南

軽き ともや 一 冥 ぬのこころ 一人 柳 柳

清き 清く とも 侍の 外 知 還

竹の 物と 侍 ぬのこころ 常 柳 全

音の とも 柳 やと 音 柳 飯の 味 里 宿

縁に ぬのこころ あり 欠 たり 志 友

栞子もこちや芳をむ行校  
白こしらは月夜の如御り

鶯は卵うさへ 鶯

女房はあまの緒のさかひゆい

朽あま水さるさるお友は

おろしは鳴りて定まらぬまき

十三より 暖湯の湯をき

時き保ハ前葉さるてはらあ

追ふあまも物の集くさる曲

大流も松垣は思ふ持たな

報しるあ〜とふ辰は

産るは言をさる花田の子

糸も糸はしてはのま

升柱の目を幸おほるは



山ほくきんま杖をふる

二

待の逆所務字とあるよ

六

杖を物流る。ほくきんま

こもりくれかたふまふまの里

道はくれと名の西山

三

いつとまふ満てめりまのま

集居 仲るれ結集

集

まふの歌ふお撰とあるよ

ひまふまふのまふまふ

清くまふにまふまふまふ

づんつとまふとまふまふ

草鞋をゆるあふまふまふ

四

光るまふまふまふまふ

おまふまふまふまふまふ



